カエサルと神に返すこと

ルカ福音書20:19-26（新改訳2017訳）

20:19 律法学者たちと祭司長たちは、このたとえ話が自分たちを指して語られたことに気づいた。それでそのとき、イエスに手をかけて捕らえようとしたが、民を恐れた。
20:20 さて、機会を狙っていた彼らは、義人を装った回し者を遣わした。イエスのことばじりをとらえて、総督の支配と権威に引き渡すためであった。
20:21 彼らはイエスにこう質問した。「先生。私たちは、あなたがお話しになること、お教えになることが正しく、またあなたが人を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています。
20:22 ところで、私たちがカエサルに税金を納めることは、律法にかなっているでしょうか、いないでしょうか。」
20:23 イエスは彼らの悪巧みを見抜いて言われた。
20:24 「デナリ銀貨をわたしに見せなさい。だれの肖像と銘がありますか。」彼らは、「カエサルのです」と言った。
20:25 すると、イエスは彼らに言われた。「では、カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」
20:26 彼らは、民の前でイエスのことばじりをとらえることができず、答えに驚嘆して黙ってしまった。

【祈りながら考えよう】

（１）カエサルに税金を納めることは律法にかなっていることですか。
（２）カエサルのものはカエサルに返しなさいとはどういう意味ですか。
（３）神のものは神に返しなさいとは、具体的にどういう意味ですか。

【解　説】

（１）義人を装った回し者を遣わした

「律法学者たちと祭司長たちは、このたとえ話が自分たちを指して語られたことに気づいた。それでそのとき、イエスに手をかけて捕らえようとしたが、民を恐れた。さて、機会を狙っていた彼らは、義人を装った回し者を遣わした。
　イエスのことばじりをとらえて、総督の支配と権威に引き渡すためであった。」（19-20節）

律法学者や祭司長たちは、何とかして主イエスを捕らえ、一気に殺してしまおうと躍起になっていた。

そこで、彼らは、神を敬っているふりをした回し者を送り込み、主イエスに質問し、その言葉じりを捕らえて、ローマの総督の手に渡し、処刑に持ち込もうとした。

（２）カエサルに税金を納めることは律法にかなっているか、いないか

「先生。私たちは、あなたがお話しになること、お教えになることが正しく、またあなたが人を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています。ところで、私たちがカエサルに税金を納めることは、律法にかなっているでしょうか、いないでしょうか。」（21-22節）

当時、ローマに対する納税者は14歳から65歳までの男子、その額は毎年１デナリ、つまり１日分の労賃であった。

それ自体別に重税というわけではない。しかし、それを問題として取り上げたのには、理由がないわけではない。

というのは、ユダヤ人がローマの貨幣を使って納税することは、神の選民が異邦人に従属することを意味することになるからである。この税金をめぐる人々の態度については、３つの考え方があった。

第１は、積極的肯定派で、それはヘロデ党やサドカイ派の人たちである。

第２は、消極的追従派で、パリサイ派と隠遁生活をしていたエッセネ派の人たち。

第３は、積極的反対派には、愛国主義の熱心党の人たちが属していた。

こうした情況の中で、神を敬っているふりをした回し者を送ったのは、主イエスからローマ帝国への納税反対の言葉を引き出して、ローマの権力に引き渡そうとしたわけである。というのは、主イエスのように神に対して熱心で、しかもメシヤ意識を持っている人は、きっとローマ帝国への納税反対を言うに違いないと思ったからである。

もしイエスがここで、「税金を納めるべきである」と答えれば、愛国的なイスラエル人からかなりの反対を受けることは間違いなかった。この反対に、「納めるべきでない」と答えれば、そのことはただちにローマの総督ピラトに報告され、イエスはその日のうちに逮捕されることになる。これで分かるように、彼らの尋ねた問は、イエスを挟み撃ちにしてジレンマに陥れるためのものであった。

（３）カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい

「イエスは彼らの悪巧みを見抜いて言われた。『デナリ銀貨をわたしに見せなさい。だれの肖像と銘がありますか。』彼らは、『カエサルのです』と言った。すると、イエスは彼らに言われた。『では、カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。』」（23-25節）

しかしイエスはそのたくらみを見抜いて、「デナリ銀貨をわたしに見せなさい。だれの肖像と銘がありますか。」と逆に相手に問い返した。そこにはローマ皇帝の像と銘が刻まれていた。

権力者が自分の像を刻み込んだ貨幣を発行することは、それを使用する民から税を徴収する権利があることを意味していた。そこでイエスは、「カエサルのものはカエサルに返しなさい」と命じ、次いで「神のものは神に返しなさい」と命じた。彼らは、このイエスの答えを聞くと、驚嘆して黙ってしまったと記されている。

イエスに対してこの問を発したイスラエル人の考えの根底には、ユダヤ教への忠誠とローマへの忠誠とは互いに両立しないという前提がある。つまり彼らは、異教徒による政治的支配に対して否定的な立場にいた。

しかし、ローマという異教徒の支配ではあっても、ユダヤ人がその統轄下で平和の恩恵に浴しているからには、税を納めることは当然であって、宗教的な理由からそれに反対するのは正しくない。

（４）神のものは神に返しなさい

「神のものは神に返しなさい」との主イエスの御言葉の真意を理解するためには、この出来事のすぐ前で主イエスが語られたぶどう園のたとえを思い出す必要がある。

主イエスはそこで、ぶどう園を私物化しようとしていた農夫たちのことを語られた。ぶどう園は本来、主人のものである。農夫たちはそのぶどう園を主人から任されて、ぶどう作りをしているにすぎない人たちである。ところが、ぶどう園の主人が収穫の中で自分の分を受け取ろうとして、しもべを送るが、みんなひどい目に遭わせ、何も持たせずに送り返す。最後に主人の跡取り息子を送ると、その息子を殺し、ぶどう園を自分のものにしてしまう。

その時学んだように、これは神のものを自分のものにしようとしている人たちで、ただ単に昔のユダヤ人だけのことではなく、今日の私たちにも当てはまること。

私たちは自分の人生、自分の才能、自分の財産、自分の時間など、それらのものはすべて本来神のものであって、神からお預かりしているのに、それがあたかも自分のものでもあるかのように思い、そのように扱っていないか。そのことがここでもう1度問われている。神のものを神にお返ししているかと問われている。